

地域に根付く卓球スポーツ少年団の今後の在り方についての一考察

—総合型地域スポーツクラブの考え方を取り入れて—

1150472 松山明花

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

近年、子どもの体力・運動能力の低下や大人のスポーツ離れが進んでいると言われている。社会環境や生活様式の変化などにより、運動する機会の減少や生活の乱れが生じてきている。そのため、子どもの体力・運動能力も長期的に低下傾向にあり、また、運動する子どもとしない子どもの二極化の傾向も問題にされている。そこで学校や地域では、スポーツを通した子どもの健全育成を願って多くの指導者が改善に向けて取り組みを行っている。本研究では、特に地域でのスポーツ活動を行なっている『スポーツ少年団』に焦点をあてる。そして、香川県の地域に根付いた活動を行っている卓球少年団をひとつのモデルとして、地域に根付くスポーツ少年団の問題点を明らかにし、スポーツ少年団のこれからの在り方や、将来的に長くスポーツに親しんでもらうための小学生に対する指導の仕方を提案する。その結果、スポーツ少年団を幼稚園から成人までが参加できる多世代型のクラブにし、スポーツ少年団を卒業した団員の「帰る場所」を作る必要がある。また、児童期に出会うスポーツ指導者は、子どもが将来スポーツに長く親しんでくれるかどうかを決める重要な役割を担っている。指導者は、子どもの「個」を大切にしながらスポーツの楽しさを教え、セルフコーチング力を身に付けさせる必要がある。これらを行なうためには、多世代型という総合的地域スポーツクラブの考え方を取り入れ、指導者の、児童期のスポーツ指導を行うための優れた指導能力、知識が欠かせない。

2. 背景

近年、子どもの体力・運動能力の低下が問題視されている。2004年1月に出された中央審議会『子どもの体力向上のための総合的な方策について』の答申の概要によると、「昭和60年ごろから子どもの体力・運動能力の低下傾向が続くとともに、肥満傾向の割合が増加し、将来の生活習慣病への危険性が高まっている」とされている。また、中央審議会（2002年）では、「文部科学省が昭和39年から行なっている『体力・運動能力調査』によると、子どもの体力・運動能力は、調査開始以降昭和50年ごろにかけては、向上傾向が顕著であるが、昭和50年ごろから60年ごろまでは停滞傾向にあり、

昭和60年ごろから現在までは低下傾向が続いている。」と述べられている。表1-1から分かるように、50メートル走では昭和60年度と比べて、男子は0.16秒、女子は0.12秒遅くなっている。また、ソフトボール投げでは、男子は5.6メートル、女子は3.7メートルの記録の低下がみられる。

表1-1 小学生（11歳）の体力運動能力の変化（一部抜粋）

	昭和60年	～	平成18年	～	平成25年
50メートル走男子(秒)	8.75	～	8.89	～	8.91
女子	9.00	～	9.22	～	9.12
ソフトボール投げ男子(m)	34.0	～	29.5	～	28.4
女子	20.5	～	17.2	～	16.8

続けて答申には、子どもの体力・運動能力の低下の実態として、以下の3点が書かれている。

- ① 親の世代である30年前の調査と比較すると、ほとんどのテスト項目について、子どもの世代が親の世代を下回っている。
- ② 部活動やスポーツ少年団などで運動を日常的に行なっている者の体力・運動能力は、運動を日常的に行なっていない者を上回っている。
- ③ 体力・運動能力が高い子どもとそうでない子どもの格差が広がるとともに、体力・運動能力が低い子どもが増加している。そして、「このことはスポーツ少年団や部活動などで運動をよくする子どもとほとんどしない子どもとの二極化傾向が指摘されていることと無縁ではないと思われる」と報告されている。

表1-2 小学生（11歳）の身長体重の変化（一部抜粋）

	昭和60年	～	平成18年度	～	平成25年度
身長男子(cm)	143.2	～	145.1	～	145.2
女子	145.5	～	147.0	～	146.8
体重男子(kg)	36.0	～	38.8	～	38.1
女子	37.8	～	39.5	～	38.7

また、表1-2から昭和60年度と比べて、50メートル走やソフトボール投げなどの体力・運動能力は低下傾向にあるが、身長や体重などの体格は向上しているということがわかる。体力は、人間が

生活していく上でとても重要な要素の一つである。体力を維持していくためには生涯スポーツを行っていくことが大切であるが、小学生の時期に、どのような指導者の元でどのようにスポーツと関わっていくかによって、その子どもが将来スポーツに親しみをもち、どれだけ長く続けていくことができるのかが決まると述べている文献もある。学校外でのスポーツ活動は色々あるが、ここでは、より地域と密着し、スポーツの原点であるスポーツを楽しみ、青少年の心と体を育てることを理念として活動を行うスポーツ少年団の可能性に着目し、スポーツ少年団の指導者は、小学生に対してどのような意識を持って指導を行なっていくべきか考える。

3. 目的

本研究は、まずスポーツ少年団の現状を概括する。次に、30年以上の長期間に亘って存続しているスポーツ少年団に着目し、長期間存続している理由を明らかにすることによって、地域に根付くスポーツ少年団の可能性と将来像を考察し、子どもに対する理想的な指導方法を提案する。

4. 研究方法

本研究は、はじめに、小学生の体力・運動能力推移の現状について調べ、そのような結果を生みだしている原因を、先行研究から読み取り、問題点を整理する。同時に地域と密着して活動を行なっているスポーツ少年団の現状、問題点を文献及びヒアリングによる調査を実施し、その結果を整理する。次に、子どもの頃にスポーツをする楽しさを学ぶことができれば、その子どもは将来的に継続してスポーツ活動を行い、その人の子どもにも積極的にスポーツを行うことを奨励する傾向にあるとの仮説を導く。その上で、適切な指導方法、すなわち子どもの将来を考えた上で指導者はどのような意識を持って、小学生の時期にどのような指導を行なっていけばよいのかを提案する。また、自分自身の経験からもこの問題について考察する。最後にこれらの調査でわかったことを元に、問題の解決方法、地域に根付くスポーツ少年団のこれからの在り方について検討する。

5. 結果

5-1 子どもの体力・運動能力低下について

背景で述べたことから、身長体重などの体格は向上しているが、知力・運動能力などの体力面は減少傾向にあるということが分かる。

子どもの体力・運動能力低下の主な原因について、まず外遊びやスポーツの重要性の軽視など国民の意識の変化が上げられる。次に子どもを取り巻く環境の問題として、生活の利便性の向上やスポーツや外遊びに不可欠な要素（時間、空間など）の減少がある。他に

も、就寝時間の遅さや、朝食欠食などによる栄養バランスの崩れからなる生活習慣の乱れも上げられる。これらのことが原因の一つとしてあげられ、長期的にみると体力・運動能力の低下に繋がっていると考えられる。しかも、運動に親しむ子とそうでない子の二極化だけでなく、体力・運動能力そのものが二極化してきていること、体力・運動能力が低い子が増えてきている。子どもの頃のスポーツ活動は、肥満などの生活習慣病予防となるだけではなく、生涯に渡ってたくましく生きるための健康や体力の基礎を培うとともに、公正さと規律を尊ぶ態度、協調性や自主性、克己心を養うなど、人間形成に重要な役割を果たす。スポーツに親しむ子とそうでない子、得意とする子と苦手意識を持っている子、どのような子どもであっても、楽しく積極的にスポーツに取り組めるような環境づくりが必要である。

5-2 スポーツ少年団の現状

スポーツ少年団は、子どもたちはスポーツの楽しさを学び、協調性や自主性を養い、社会のルールや思いやりのこころを教えると考えられている。スポーツ少年団では、スポーツの楽しさ、体を動かすことの楽しさを知り、生涯に渡ってスポーツに親しむ習慣をつけ、健康に過ごしていくための子どもの頃からのスポーツの実施・普及を行うことのできる点が特徴である。しかし、現在、地域に根付くスポーツ少年団の中には、団員の減少や指導者の不足、保護者との関係など、様々な問題が発生している団体が少なくない。その主な要因は、先に述べた、子どもの運動の機会の減少、並びに、近年活躍しているスポーツ選手の低年齢化による、保護者のニーズの変化である。健康に過ごしていくための子どもの頃からのスポーツではなく、そのスポーツで幼少期からいかに良い戦績を上げ、活躍するかに重点が置かれるようになりつつある。そのため、強い監督やコーチなどにお金を払って指導してもらうために、自分たちの子どもを、スポーツ少年団から、商業的なクラブに移す保護者が増加している。

保護者のニーズの変化は、地域スポーツ少年団の運営状況の悪化だけでなく、子どもたち自身にも影響を及ぼしている一面がある。幼少期から過度な期待をされ、勝利至上主義的な考え方で指導された子どもの多くは、徐々に疲弊し、後々スポーツから遠ざかってしまう傾向も見られる、というのである。これらは、子どもの頃のスポーツ活動は、スポーツの楽しさを学びつつ心身の健全な発育・発達を目指し、生涯に渡ってスポーツに親しむ習慣を身に付けるために行なわれる必要があること、スポーツ少年団はその担い手として、今後も重要な役割を果たすことができる可能性があることを示唆している。

5-3 長期間に亘って存続するスポーツ少年団の理由

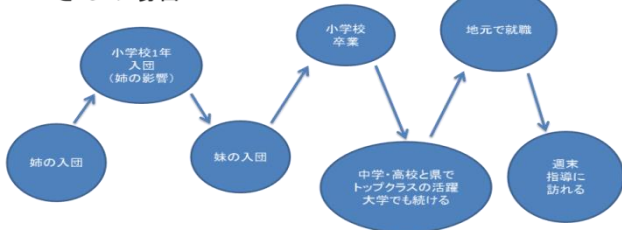
心身ともに健全な発達のためにスポーツを行う人が減少し、スポーツ少年団に入団する人数も減少傾向にある現代において、長期間に亘って存続している少年団はどのような活動を行っているのか。実際にスポーツ少年団に行き、ヒアリング調査を実施した。実施したのは香川県の卓球スポーツ少年団、五峯クラブで、お話を伺ったのは監督、コーチ2名、現団員2名、卒業生3名である。五峯クラブは香川県下笠居地区を中心に、創立約32年の活動を行っているスポーツ少年団である。現在の団員は約30人で（幼稚園・保育園児9人、小学生7人、中学生9人、成人4人、コーチ2人）週4回、小学校の体育館などで基本練習を中心とした活動を行っている。

五峯クラブでは、小学生だけではなく卒業した中学生や高校生、一般の方も訪れ、全員で一緒に練習を行っている。つまり、通常のスポーツ少年団ではあまり見受けられない多世代型での活動を行っている。五峯クラブでは、初めから多世代型の方針で活動を行っていたわけではない。活動を続けていくうち、家族で参加する方や、以前活動していた人方が地元に戻ってきて練習に参加するようになり、現団員の指導を行うようになった方、自分の子どもやその友だちを連れて参加するようになった方などが現れ、それらの方々を受け入れたことから今のような形態になった。これらの多世代型での活動体系や基本中心の練習方法に、これからの地域に根差すスポーツ少年団の在り方や、スポーツ少年団での指導の仕方を考えるうえでのヒントが隠されているように思われる。

5-4 スポーツ少年団での指導方法について

今回ヒアリング調査を行って、スポーツ少年団が長く存続していくためには、活動形態だけではなく、監督、コーチの存在や指導方法の影響が大きいと感じた。

・ Nさんの場合



Kさんの場合

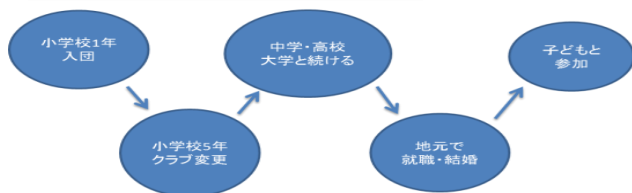


図5-1 元団員の五峯クラブとの関わり（例）

Nさん（22歳）は、小学校1年の頃、姉の影響で五峯クラブに入団した。続けて妹も入団し、3人とも小学校卒業まで活動し、卒業後、中学、高校、大学と続け、地元で就職することになった。今では休みの日に少年団を訪れ、指導の手伝いをしている。Kさん（26歳）は、小学校1年生で入団し、小学校5年生の時により強い人と練習ができるクラブに移動した。その後も卓球を続け、地元で就職・結婚し、現在では、休みの日に3歳になる子どもと一緒に五峯クラブの練習に参加している。

この2人に共通して言えることは、小学校の頃五峯クラブで活動し、一旦クラブを離れているが、また戻ってきているという点である。その理由として、「小学生の頃、監督やコーチの指導のおかげで楽しく練習に取り組むことができ、中・高・大学まで続けようと思え、人間的にも成長できた。今度は、お世話になった監督のためににか手伝えなにかと思い、時間がある時に指導に訪れるようになった。」（Nさん）「クラブを途中で移動したのは、同年代だけではなく、より強い一般の方と多く練習がしたいと思ったからだった。移動した後でも、監督・コーチは温かく接してくれ、また、初心者の頃に身につけた基本の技術は大きくなってからも役に立った。自分の子どもが生まれ、どこに連れて行こうかと考えた時、子どもと同年代の子がいて、自分も一緒に参加でき、基本から丁寧に教えてくれるため、各自のペースで楽しく卓球ができるのは、五峯クラブだった」（Kさん）、という話を聞くことができた。他の団員や卒業生、コーチの方にも、「五峯クラブで活動してよかったことは」と質問したところ、「友だちが増えた」「精神力、コミュニケーション能力、協調性などが身についた」「様々な年代の人や、上手な人とも練習することができるので楽しい」「色々な人の考え方や意見を聞くことができる」「友だち、監督、コーチのおかげで練習が楽しくて、小学校を卒業しても続けようと思えた」「卒業しても気軽に訪れられる」「子どもが幼くても受け入れてくれる」などの意見があった。「指導方法で良いと感じる点は」という質問には、「基礎基本を重点的に教えてくれるので、小学生の頃は楽しく取り組み、年齢を重ねていっても基本がしっかりしているので、ある程度安定した選手に成長する」「同年代での練習だけでなく、一般の人と練習できて勉強になり、楽しみながら上達できる。また、自分より小さい子と練習することで、ラリーを続ける、台に入れるという意識をより強く持てるようになる。」との回答を得た。

これらの事から、小学生の時期に「スポーツは楽しい」ものであると知ることができれば、子どもは長くスポーツに親しみ、生涯スポーツに親しみを持って生活していくのではないかと考えること

ができる。そして、自分の子どもにも積極的にスポーツに取り組ませるようになる傾向がみられる。このためには、先ほど述べたように、少年団の組織形態だけではなく、指導者の指導方法や意識の持ち方が重要となる。

6. 対策と提案

スポーツ少年団の多世代化

地域に根付く卓球スポーツ少年団の今後の在り方について、スポーツ少年団でも、総合型地域スポーツクラブの考え方を取り入れた、多世代化の推進を提案する。多世代で活動すると、あいさつなどの礼儀作法、コミュニケーション能力がつくだけではなく、視野の広がり、新たな発見、技術の向上などにも繋がる。そういった成長、気づきは年齢とは関係なく、感じることができるものである。スポーツの中でも卓球は特に、年齢に関係なく大人も子どもも対等に競い合ったり楽しんだりすることができるという特徴がある。この特徴を生かすためには、スポーツ少年団でも多世代型の形をとることができれば、様々な利点があると考えられる。

そして、子どもの頃に「スポーツは楽しい」と感じてもらうことは、その人が将来的に長くスポーツを続けていくきっかけになると思われる。この点から考えると、スポーツ少年団での活動は、子どもの頃のスポーツ活動において適したものであると言える。少年団の活動は主に小学生が中心であるという考えに縛られず、多くの人と一緒に楽しくスポーツができる場所を作っていくことが大切であり、長くクラブが存続していく理由になる。少年団で活動していた子どもが成人や親になり、地元に戻って来た時、自分の子どもや地域の方と一緒にスポーツに親しめる環境づくりが、生涯スポーツの推進、スポーツ少年団の復興にも繋がると考える。お互いに教え、教えられながら成長していく場所として、スポーツ少年団は存在していかなければならない【1】【2】。

スポーツ少年団での指導方法

スポーツ少年団での指導は、ナショナルチームなどの強くなるためのものではなく、スポーツに楽しく取り組みながら、様々な経験をし、その経験を後々の自分の人生に活かし、生涯スポーツに親しんでいってもらえるようなものでなければならぬ。そのためには「できる経験」「成功を重ねる」ことに重点を置く。経験を重ねることにより楽しくなり、上達する。上達すると、目標や夢を持つようになる。そこで、指導者は楽しいだけではなく子どもに合わせて、技術や運動能力を高める指導を行い、それに伴ってマナーなどの礼儀も身に付けさせる。目標が達成されると自信がつき、競技が面白くなる。そして継続して取り組むようになる。そして、目標が達成

されなかった場合、指導者は結果にこだわるのではなく、結果の中の過程から成功を見つけ、子どもを次の段階に導く。特に小学生には、指導者の助けが必要な部分がある。指導者は、あくまでも手助けをするという意識でいることが大切である。そして子どもが指導者の助けを借り、目標を達成することで自信に繋がる。このような流れができると、生涯スポーツに親しむ人が増加し、結果的に何世代にも渡って、スポーツを身近に感じることのできる生活が送れるようになるのではないかと考えた（図3-1）。

スポーツを行う上で、勝ち負けは必ず存在する。指導者は、勝ち負けだけではなく、子どもを中心に、子どもの成長に重点を置いて見守っていかなければならない。子どもの持つ人間性を忘れず、同じ目線に立ちながらも、子どもが自分自身で考える猶予を用意し、自分で判断して行動できる選手を育てていかなければいけない。特に小学生の時期には、偏った能力ではなく、将来どのような選択を行っても、自分で成長していける力を身に付けてもらえるような指導を行っていく必要がある【3】。

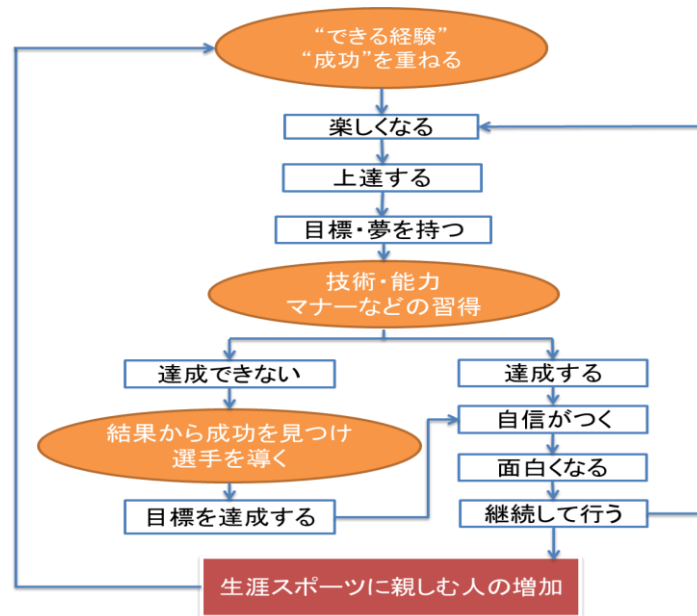


図6-1 スポーツ少年団での指導モデル

8. 参考文献

- 【1】 『Sports Japan』 公共財団法人日本体育協会
(2013年～2014年号)
- 【2】 谷口勇一氏 論文『スポーツ少年団活動の質的変容から導き出すべきスポーツの課題』 2005年
- 【3】 和田 英明氏 論文『スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ活動を求めて』 2006年
- 【4】 香川県スポーツ少年団 HP 卓球協会
(<http://hakuzan.net/kagawakentta.html>)